1. 自分が興味を持って勉強している内容

私は理工学群社会工学類都市計画主専攻に所属している。学類の名前からは何を学んでいるか伝わりづらいため、以下では私の所属する学類や専攻について述べる。

まず、私の学んでいる「社会工学」は、数理的なアプローチを用いて社会問題を解決することを目的とする学問である[1]。社会工学類には、社会経済システム主専攻・経営工学主専攻・都市計画主専攻の3つの専攻があり、2年次の秋学期からそれぞれの主専攻に所属することとなる。ただ、学生は、配属された専攻以外の専攻が開講する講義の履修をすることが必須となっており、社会工学をさまざまな視点から学ぶことが求められている。

私は、高校時代に読んだ山崎亮さん著の『コミュニティデザイン』や、筧祐介さん著の『地域を変えるデザイン』の影響から、社会に出た際にはまちづくりに関わる仕事をしたいという漠然とした希望を持ち、都市計画主専攻に所属することとなった。都市計画主専攻では、都市計画に関する知識を学ぶ座学の講義のほか、GISやSPSSといった地図情報や統計情報を解析するソフトウェアの扱い方を学ぶ講義、そしてグループを組んでまちづくりや都市計画の課題について話し合う演習形式の講義等、多岐にわたった講義が展開されている。

その中でも、演習の講義が最も有意義であったと感じる。当時グループを組んだ仲間とは、講義だけにとどまらず、講義終了後にサークル（つくば市まちづくり学生団体かざぐるま)を立ち上げた。サークルでは、つくば市内において、多世代交流を行ったり地域住民や大学生が参加できるマルシェを企画したりと、まちづくりに関わるさまざまな活動を行っている。現在は、つくばみらい市にも活動範囲を広げ、スポーツイベントの中で職業体験を行うことのできるブースの企画・運営を行っている。このように、単に知識を学んで終わるのではなく、学んだことを社会に直接還元できることが社会工学、都市計画・まちづくりの最大の魅力であると考えている。

2. 個人パート

以下では、3日間のフィールドワークでの経験に基づいて、長野県における観光について気が付いた点等をまとめる。

2-1. 長野県に対して持っていたイメージ

私は、昨年夏にも長野県千曲市を訪れたことがあるため、千曲市がワーケーション等の先進的な取り組みを行っている自治体であること、長野県全体として、自然が豊かで温泉や食といった観光資源が充実していることは知っていた。その一方で、軽井沢・松本といった全国的にも知名度の高い観光地以外の印象はそこまでなかった。またウィンターシーズンには、長野県各地にスキーという一大コンテンツを楽しむ場所が数多く存在するものの、夏場に体験できるコンテンツが不足しているという印象を抱いた。さらに、長野県と聞くと、山奥の地域という印象があり、東京からのアクセス性が過小評価されているのではないかと感じていた。

2-2. 実際に来てみて気がついたいいところ

本項では、私がフィールドワークを行った小諸市を対象に、実際に長野県を訪れて感じた良さを述べる。

小諸市は、全国に 352 都市あるウォーカブル推進都市の 1 つに指定されている[2]ように、居住性の極めて高い都市であると感じた。実際に小諸市街を歩いたところ、図 1 の中心市街地活性対象地域に指定されている区域は、高密に建物が立ち並んでいた。さらに、以下のように Walkable, Eye Level, Diversity, Open というウォーカブルシティの 4 つの要件を満たしていることから、小諸市はウォーカブルシティとして完成度の高い地域であると考える。

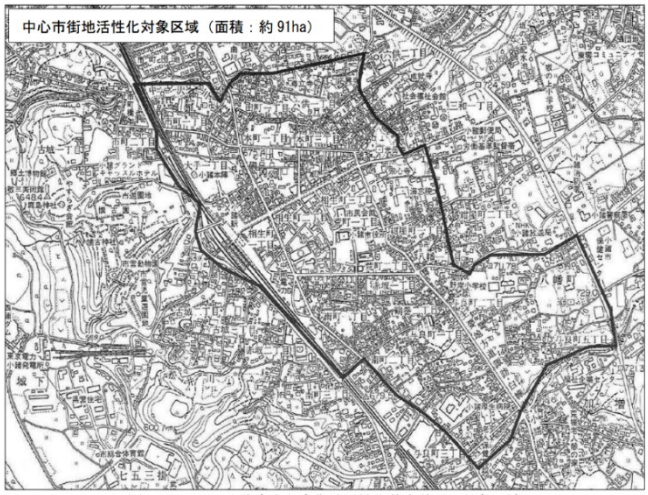

図 1　小諸市　中心市街地活性化対象区域[3]より引用

・Walkable……

・駅前から相生町に向かう大通りは、歩道が整備され歩きやすい環境(図 2)

・市役所、図書館といった公共施設が敷地内に集中している(図 3)

・都市機能が集約されており、回遊性に優れている

図 2 小諸市相生町の様子[筆者撮影]

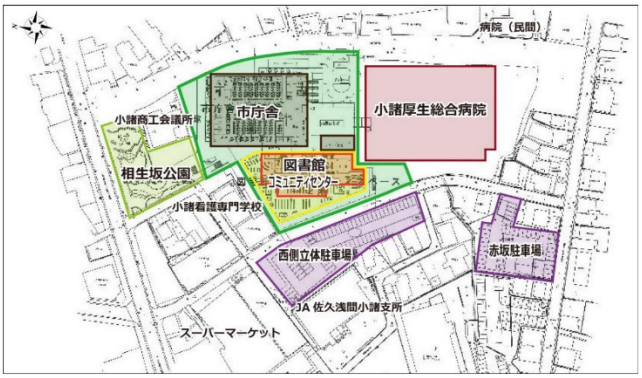

図 3　小諸市中心部における都市機能の集約[3]より引用

・Eye level……

・商店の 1 階部分が通りに開けている(図 4)

・公共施設周辺にはある程度緑地が存在する

図 4 小諸市相生町の商店街[筆者撮影]

・Diversity……

・公共施設（乗り合いタクシー)とスーパーが一体となった施設が存在（図 5, 6）

・市役所周辺には商店街が充実

・街並み環境整備事業により、市街地内部には歴史的な建物が現存している（図 7）

図 5 こもテラス内部の様子[筆者撮影]

図 6 こもテラスの外観[筆者撮影]

図 7 小諸観光交流館[筆者撮影]

図 8 小諸城大手門公園[筆者撮影]

・Open……

・敷地内には緑地やベンチも多く存在（駅前の大手門公園周辺にもゆとりある空間（図 8））

・公共空間が充実し、ゆとりある観光ができる

2-3. もう少しこうだったらいいなと思うこと

前項で述べたように、小諸市は、ウォーカブルシティとして高い居住性を確保している一方で、観光地としては課題を抱えていると考える。以下では、小諸市中心部の 3 つのエリアについて、それぞれ観光地としての課題を述べる。

【市役所周辺】

まず、市役所周辺については、公共施設が密集しているため、居住空間としての完成度は高いものの、観光客が訪れた場合、観光することのできるコンテンツが十分に整っていないと感じた。また、しなの鉄道の線路が、小諸城跡を物理的に分断しているため、人の流れも線路の東西で分断されており、1 つの城としての一体感ある空間作りをすることが困難であると感じた。実際私が小諸を訪れた際も、駅の東西に城跡がまたがって存在しているということが特殊

図 9　市役所周辺の課題[7 を基に筆者作成]

すぎて、理解するのに時間を要した。さらに、市役所周辺だけでなく小諸市全体的に言えることだが、島崎藤村ありきの観光をしている印象が根強く、それだけで果たして観光客を引き付けることが出来るのか、疑問の声を上げている地元住民もいた。

【小諸駅西口】

小諸駅西側に所在する懐古園は、小諸市で最も観光客が集まる観光地であるが、観光客が訪れえるのは、桜や紅葉のシーズンが中心であるそうだ。懐古園内には八重桜の木が植わっている等、花見シーズンには素晴らしい観光地となりそうだと感じた一方で、オフシーズンに観光客が楽しむことが出来るようなコンテンツが不足していると感じた。特に、小諸市動物園は、部分休園中で、見ることのできる動物の種類が大幅に限られていることも相まって、非常に人の流れが少なかった。さらに、スタッフがいなかったり BGM が流れていなかったりしたため、営業中にも関わらず非常に静かな空間となっており、本当に営業中であるのか心配になってしまうほどだった。また、前述したように小諸城跡がしなの鉄道の線路によって分断されているため、線路よりも東側に向かう人の流れが生じにくくなっていると感じた。

図 10　小諸駅西口の課題[7 を基に筆者作成]

【北国街道】

北国街道沿いには、生活のための拠点が多く存在していることから、観光地というよりも住民が生活するための場所という印象を受けた。また、歩道が狭いうえに車の往来が活発にある場所のため、観光客が歩いて観光するには向かないと感じた。さらに、電柱が地上に出ており、歴史的な街並みとミスマッチな景観となっていたため、北国街道を観光地として押し出していくためには、電柱の地中化といった施策が必要だと感じた。私は、北国街道から 1 本裏道に入った酒蔵を訪れたが、北国街道からのアクセスがしづらいと感じた。これは、北国街道周辺の案内図等の観光客向けの情報が不足していること、北国街道以外の道路が観光向けに十分整備されていないことが原因であると考える。

図 11　北国街道周辺の課題[7 を基に筆者作成]

2-4. 小諸市における観光戦略提案

前項で述べた小諸市の観光課題を解決するために考えた観光戦略を提案する。

2-2 項で述べたように、小諸市はウォーカブルシティとして住環境が完成しているまちであるが、観光客を受け入れるのに適した都市構造になっていないと感じた。そのため、現状のウォーカブルシティとしての小諸市の魅力を活かすためにも、無理に観光客を呼び込もうとせず、既存の施設を十分に活用することを主眼に考えればよいと考える。具体的には、市街地中心部に集中している公共施設を観光拠点としても活用できるように整備したうえで、小諸市郊外部へと向かう観光客のための拠点とすることを提案する。

図 3 にあるように、小諸市は市役所や図書館等の施設が集約して存在しているほか、図 5 の「こもテラス」のように、商業施設と公共施設が一体となった施設が市街地の中心部に存在している。しかし「こもテラス」内部には、「コモールひろば」(待合室や休憩スペース、及びキッズスペース)・運動指導室・サークル室があるのみである等、これらの公共施設は市民向けであり、建設費等の収益回収が出来ているのかは疑問である。実際に「こもテラス」を訪れたところ、相乗りタクシーの到着前には待合スペースを利用する高齢者を中心とする利用客の姿が多くみられたものの、相乗りタクシー発車後には施設内は閑散としていた。

そこで、これらの公共施設を観光客にも利用しやすいような形にすることで、収益率の向上に貢献することが出来ると考えた。具体的には、「こもテラス」を小諸市郊外部へと向かう観光客のための拠点とすることである。現状小諸市内の中心と郊外部を結ぶバスは、小諸駅に集中している。小諸駅にバスが集中していることで、小諸市外から小諸駅を訪れた観光客は、小諸駅前にしか滞留せずに周辺の観光地を訪れることはない。そこで、バスの発着の中心を「こもテラス」にすることで観光客が小諸駅前を回遊する可能性が向上するとともに「こもテラス」をバスの待合所として利用する観光客が増加することで公共施設の利用率が向上することが見込まれる。さらに「こもテラス」内に直売所やお土産屋を設けることで、収益をあげることが可能になると考える。

図 12　バス拠点の移動による効果(予想)[7 を基に筆者作成]

以上のように、住民のために作られた公共施設を観光客が利用しやすいように工夫することで、観光客にとっては利便性の向上、行政にとっては公共施設の利用率向上及び建設費の回収といったメリットが得られると考える。

また、現状の観光資源のさらなる有効活用として、北国街道の在り方について提案する。

北国街道は、歴史的な街並みがあるにも関わらず、電柱の存在により歴史的景観が十分に活用されていないことや、生活拠点となっていることで車の往来が激しく観光客が落ち着いて歩いて観光するには向かない場所であることが課題であった。

そこでまず、北国街道沿いの電線を地中化することを提案する。歴史的な街並み内部の電線を地中した先行事例として、埼玉県川越市が挙げられる。川越市は、商店街の衰退で蔵造りの建物が壊されてい

た現状を打開するために「川越蔵の会」を発足させ、平成 4 年までの約 2 年間の間に電線の地中化工事を完了させた。その結果、観光客が増加したほか、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。そのため、選定により国等からの補助金が得やすくなり、街並みの保全が容易になった。このように、電線の地中化はコストが莫大となる点が難点ではあるが、コストを抑えた工法の開発が進んでいることや国全体として電線の地中化率が低いことを問題視する声があること、さらに何と言っても観光地としての魅力を大きく向上させ得ることから、施策の 1 つとして検討する余地があると考える。

また、北国街道が観光客にとって歩きやすい観光地となるために、歩行者天国の実施を提案する。なお、具体的な歩行者天国の対象範囲は、図 13 の青点線で示した範囲である。

北国街道は、銀行等の日常生活のための施設が多く存在する場所であるため、常に歩行者天国にすることは困難であると思うが、銀行が休みになる休日や、年末年始・お盆期間といった観光の繁忙期には車の通行を禁止する意義はあるのではないかと考える。定期的な歩行者天国の開催が難しいようであれば、1 回限りのイベントのような形で実施しても良い。その際に、周辺交通や人流等の変化に関するデータを収集することができれば、北国街道の通行禁止が住民の日常生活に与える影響を定量的に測定することが可能である。

図 13　北国街道歩行者天国　対象範囲[7 を基に筆者作成]

歩行者天国の実施によって観光客の回遊性を向上させることで、観光客の長時間滞在に貢献するのではないか。住民側の視点で考えても、市街地中心部を歩いて移動するようになることは駅前の滞留時間を伸ばすことにつながり、経済活動の活発化、さらには健康増進にも寄与する。まちづくりの視点から考えると、市街地中心部への車の乗り入れを禁止することで、さらなるウォーカブルシティの推進が期待される。

以上のようなさまざまな相乗効果を生むことが期待されることから、北国街道における歩行者天国の実施は、1 度試験的にでも実施することを提案する。

2-5. ローカルヒーロー/フィールドワークを通じて記憶に残っていること

今回のフィールドワーク全体を通して出会ったローカルヒーローの方々は、自身のキャリアを後押ししてくれるような力強い存在であり、お話を伺うことが出来て非常に光栄だったと感じている。

観光戦略を考えるうえでは、観光振興の施策によって観光振興を行おうとするのは至極当然のことであるが、ローカルヒーローの方々は観光振興が目的ではなく、1 人の人を成長させたり、人と人をつなげたりするための手段として観光振興を捉えていると感じた。さらに、通常の観光振興の手段としては、自然や食といった観光資源や観光施設を活かして観光客を集めようとすることが考えられるが、ローカルヒーローの方々は資源や施設には頼らず、直接人の気持ちに訴えかけるような取り組みをされていることが分かった。

観光に限らず自身の希望や目的を達成するためには、希望を実現したいという強い気持ちが必要であることを学んだ。さらに、気持ちを抱くだけでなく、実際に行動に移すことが成功に必要不可欠だと感じた。

結局のところ、人を動かすのは自身や他人の強い気持ちであり、お金や権力ではないと痛感した。

2-6. 貢献できそうなこと

まちづくりを専門に学ぶ学生の立場から、私は観光戦略立案に関わることが出来ると考える。観光戦略を決定する際、観光の専門的視点から考えることが大前提であると考えるが、観光戦略とまちづくり・都市計画との間のバランスがうまく取れていないと、そこに居住する住民の生活がないがしろにされる危険性がある。実際、観光シーズンになると、本来は地元住民の足であるはずの江ノ電に観光客が殺到し、地元住民が利用しづらくなるという問題が発生しているほか、観光客が踏切内や家の敷地内に立ち入り写真撮影を行う等の危険行為・迷惑行為を行うことで、住民の生活にも悪影響を及ぼしている。こうした過剰な観光需要や観光客による危険行為・迷惑行為を防ぎ、地元住民が生活していく中で支障が起こらないようにするためには、政策立案の段階から観光と住民生活の両方を考慮する必要があると考える。そのためには、観光分野に精通しているだけでなく、都市計画・まちづくりの観点からも、観光のゾーニングや人流の誘導を考える人材が必要であり、大学で都市計画を専門的に学んでいる私は、そのような人材になることが出来ると考えている。特に私は公共イノベーション研究室という、”自治体や地域企業が所有していながら未だ活用されていないデータを組み合わせて課題を解決する”ことを専門的に行う研究室に所属していることから、自治体の観光政策におけるデータ活用や、観光とまちづくりの両立を考えるうえでのデータ活用といった分野で貢献したいと考えた。

観光政策の対象となるのは外部からくる観光客であっても、実際に観光業に従事し、その土地で生活するのは地元住民なのだから、まちづくり（地元住民目線)側の視点からも観光の在り方を考えていきたい。

3. チームディスカッションパート

以下では、フィールドワーク最終日にチームで話し合った、観光の将来像や長野県において実現してほしいと考えた観光プロジェクトについて述べる。なお、以下の図 14 は、実際に発表に用いた資料であり、それを補足する内容を中心にまとめた。

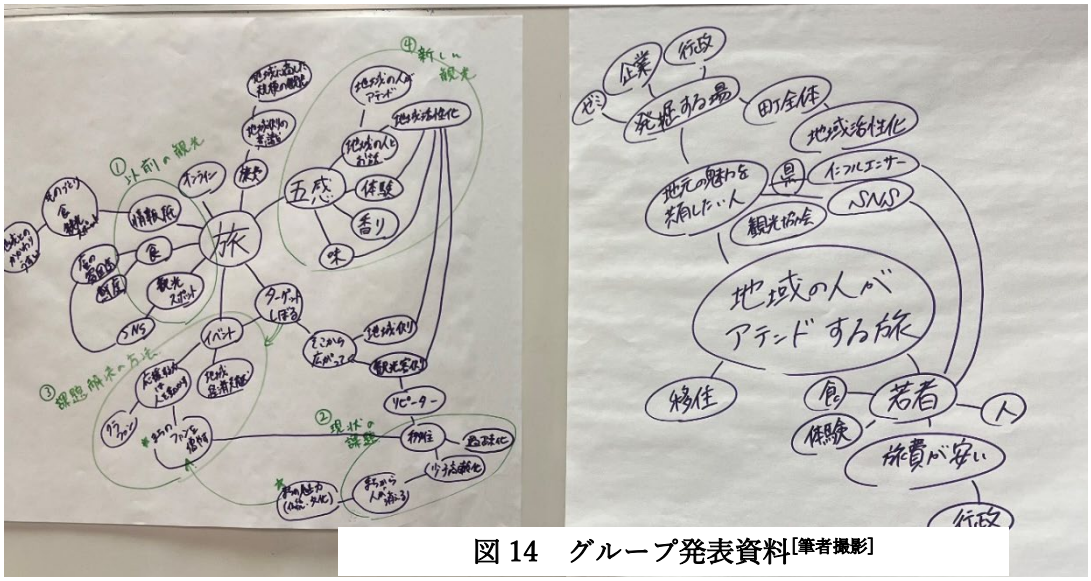

図 14　グループ発表資料[筆者撮影]

3-1. 自分たちの時代の旅の在り方

以前の観光 **モノありきの観光**

・情報誌やSNSを基に情報を収集。
・食、観光スポットといった、モノ(観光資源)に依存した観光が中心。
・観光資源に乏しい地域は人を集めることが困難。

現状の課題 **まちから人が消える可能性**

・人口減少の加速、少子高齢化の進展
・過疎化の進行(全国の約半数の市町村が過疎地域に指定されているほか、消滅可能性都市となっている)
→まちから人がいなくなる可能性(観光戦略を考える以前にまちそのものが無くなってしまう)
・コンパクトシティ政策を進めるうえでは、消滅する地域が発生するのは仕方がない
→それでも地域を存続させたいと住民等が願うのは、その地域に後世に伝えたい魅力があるから
地域を存続させる手段の一つに、移住者を増やすことが考えられる。
移住者を増やす第一段階として、まちのファンを増やす取り組みが必要。

課題解決の方法 **コアなファンにヒットするコンテンツ造成**

・まちのファンを増やすための取り組み
・幅広い層を対象にしても、心に深く響く人はあまり多くなく、効果は薄くなると考えられる
・どこで開催しようと必ず訪れるような、コアなファンを持つ分野に関連したイベント等のコンテンツを造成
(ものを応援する人の気持ちには、非常に強いものがある)
・コアなファンが現地を訪れることで消費活動が発生し、地域経済の活性化に貢献する
・ファンが現地で体験したことを発信することで、より幅広い層へと拡散。
まちのファン増加につながる。

新しい観光 **五感に訴えかける体験**

・オンラインが普及した今、わざわざ現地を訪れなくとも体験できることは増加している。
・それでも現地を訪れて観光する意義は何か。
→五感を使った体験をすること(地域の方とのお話、香り、味、雰囲気等)。
オンラインでは決して経験できない、現地でしかできない体験を提供するのが新しい観光の在り方。

3-2. 長野県で実現してほしい観光プロジェクト

“地域の人がアテンドする旅”を実現するためのプラットフォームづくり

観光客

若年層をターゲット

・若者は、**”旅費が安いこと”**が旅先を決める最大のインセンティブ
(他にも、食・体験等がインセンティブに)
⇒若者の旅行需要にマッチするためには、**行政による旅費の補助**等の施策が必要

・漠然と移住することを考えている人が、観光にやってくるかもしれない

×

地元の人

・地元の魅力を発信したい人は一定数存在すると思われる。
⇒そういった人々を**発掘する場**を設ける必要性
(行政・企業・大学のゼミを活用)

・地域の魅力を発信したい人を募ることで、地域全体の観光に対する意欲が向上する可能性

両者をつなぐ プラットフォームの設置

アテンドする地域の人を集めた人材集を作成

SNSやインフルエンサーによる発信を用いて観光客と地域をつなぐ

4. 参考資料

[1] 筑波大学社会工学類 HP “つくばの社工”とは
https://www.sk.tsukuba.ac.jp/College/outline/index.php(最終閲覧日：2023/9/18)
[2] 国土交通省 ウォーカブルポータルサイト ウォーカブル推進都市について
https://www.mlit.go.jp/toshi/walkable/walkablecity/(最終閲覧日：2023/9/18)
[3] 小諸市 立地適正化計画
https://www.city.komoro.lg.jp/soshikikarasagasu/kensetsusuidoubu/toshikeikakuka/3/1/2/5747.html(最終閲覧日：2023/9/18)
[4] 国土交通省 ウォーカブルなまちづくり
https://www.mlit.go.jp/toshi/content/001326427.pdf(最終閲覧日：2023/9/18)
[5] 筑波大学 公共イノベーション研究室 HP
https://kawashimalab.sk.tsukuba.ac.jp/(最終閲覧日：2023/9/18)
[6] 川越一番街商店街 蔵造り物語
https://kawagoe-ichibangai.com/story/(最終閲覧日：2023/9/20)
[7] Google map
https://www.google.co.jp/maps(最終閲覧日：2023/9/21)